



九州大学
大学院数理学府
博士後期課程2年
田村朋之

与えられた課題の奥深さ、親身な支援に支えられ、 産業界で活躍する自分を思い描く

ローランド株式会社にて3か月のインターンシップを体験しました。数学、とりわけ自身の専攻を実社会で活かす可能性について懐疑的であった私は、インターンシップ先を決めるにあたり、どのテーマなら「数学を活かしたい」と考えられるかという点を重視しました。

ローランドの方から、数学で解決が見込め、なおかつ、私にとっても興味

深い課題をご提示いただけただけにたいへん感謝しています。Rや統計、信号処理など、ふだんは扱わない知識を用いて、ある一定期間内で課題の解決を試みることは予想以上に負担が大きいものでしたが、課題のもつ奥深さに対して日々感動しつつ、同社の方々からの親身なご支援、ご指導を支えに課題に向き合うことで、最終的には

つの成果を生みだすに至りました。

数学を産業に応用する可能性にふれた今回の経験は、純粋数学の知見と経験のみに基づいていた私の視野を大きく広げてくれました。さらに、産業界での将来的な活躍、とくに今回の奥深い課題の発展、今後の取り組みへの希望につながりました。



九州大学



ローランド株式会社
総務・人事部
人事・教育グループ
課長補佐
南波征門

基礎学問の応用が技術的ブレイクスルーの糸口に

協議会を通じて2件の中長期研究インターンシップを実現しました。いずれの事例でも、弊社の技術者が社外の人材と交流し、実践指導をおこなう貴重な機会を得たと感じています。

基礎技術部門における事例では、インターン生と弊社技術者の共同研究を通じて、課題解決に向けた新しい技術視点を獲得することができました。基礎学問の応用が技術的ブレ

イクスルーの糸口となりうることを再確認でき、受け入れ企業として特筆すべき成果を得たと思います。

サテライト形式のインターンシップを考案したことも、運営面における一つの成果です。これはインターン生が大学研究室に在室したままインターン就業をおこなうものですが、多忙を極めるインターン生と開発現場の双方から企業内常駐の負担をなくすば

かりか、大学のもつリソース活用によりインターンシップの成果を向上させる効果がありました。

このように、インターンシップ導入による受け入れ企業のメリットを実感する今日このごろですが、今後も理工系人材の活性化に向けて、協議会を通じた取り組みを継続したいと考えています。



中長期研究インターンシップの成果 — 未来を創る種づくり

2015年度 東レ株式会社にて研修



九州大学大学院
総合理工学府
電子プロセス理工学専攻
博士前期課程2年
内田勇気

スピード感を保つための 議論の重要性を再認識

東レ株式会社の先端材料研究所で、製品の量産に関わる研究開発を体験させていただきました。この実習では、企業での研究活動は大学にくらべて「寄り道」が少ないことに気づきました。企業と大学とでは研究開発に対する目的が異なるためだと考えられます。

大学では新規性や独創的な研究に重きを置いているのに対し、企業では「利益の追求」という目標がはっきりしているため、目標達成までのスピードが求められるのだと感じました。そのスピード感を保つために、グループの方がたと議論する機会を多くうけ、目標までの方向性をつねに意識しながら取り組みました。目標達成までの過程において、議論の重要性を再認識しました。

2015年度 三菱電機株式会社にて研修



鹿児島大学大学院
理工学研究科
システム情報科学専攻
博士後期課程2年
小部敬純

研修を契機に、目的を 意識した研究にシフト

専門性の活かし方を模索できることに魅力を感じて研修に参加し、データ分析業務に関わりながら、大学での研究との違いを肌で感じました。

企業での研究開発は「社会にどう活かせるか」が第一で、限られた期間に成果をあげなければなりません。このことを意識しながら、製品保守の業務で、データの新しい見方を提案しました。これは効率的なチームワークの成果だと感じています。多分野にわたる専門家チームでのコミュニケーションでは平易で確かな表現が求められます。難しくもありますが、刺激の多い経験でした。この研修を境に、主体性や目的意識をもち、応用を意識して広い視野で研究に取り組むようになりました。

2015年度 ダイキン工業株式会社にて研修



九州大学大学院
システム生命科学府
システム生命科学専攻
一貫制博士課程4年
中村雄太

企業での研究の本質は 人のニーズに応えること

「博士の価値は専門性だけか」という疑問を解きたくて、ダイキン工業株式会社のインターンシップに参加しました。専門のことはあえて忘れ、未来の人たちが理想とする社会を分析し、そこで成立する新しいビジネスを企画しました

企業では利益が求められますが、その本質は人びとのニーズを満たすことにあります。利益を軽視すれば、そうしたニーズを考える機会も減ることに気づき、利益という具体的な数字で考えることで、その研究が将来どんなかたちで活かされるのかを、論理的かつ具体的に判断できます。今回の経験は、博士人材が社会にどう貢献できるかを考える視座をもち、社会での活躍をめざして精神的に研究を進める契機となりました。

*「九州大学・鹿児島大学インターンシップ説明会」でご報告いただいた方がた（詳細はp.12参照）

活動報告

91名の学生、31社の企業、 大学教員・関係者150名の みなさんとともに、 中長期研究インターンシップ の意義を語り合いました

平成27年度
九州大学及び鹿児島大学
修士・博士大学院生向け
研究型インターンシップ説明会

2016年1月22日(金) 9:00~19:00
九州大学伊都キャンパス内
稲盛財団記念ホール「稲盛ホール」

(おもな内容)

- 1部 インターンシップ学生報告会
- 2部 シンポジウム
主催者挨拶、来賓挨拶、事業紹介、
学生発表、パネル討論会
- 3部 企業・学生交流会



主催者挨拶

(以下、敬称略)



九州大学
理事・副学長
若山正人



鹿児島大学大学院
理工学研究科
研究科長
近藤英二



経済産業省
産業技術環境局
大学連携推進室長
宮本岩男

学生発表

インターンシップに参加した学生たちからは、研修で得た多くの「気づき」などについて報告がありました。(詳細はp.8参照)



会場風景



会場からも質問や提案など、積極的な発言が寄せられました

パネル討論会

テーマ

研究型インターンシップ における課題と展望

研究型インターンシップの意義と課題について、産学官そして学生、それぞれの立場から活発な議論がなされました。



●**大学からは**、研究型インターンシップの意義として、学生が社会からの要求を知る重要な機会であり、新しい開発の芽を作る原動力にもなる。大学の考える人材育成と企業の求める人材像とのミスマッチを解消する手段として有効、といった重要性を認める声が多かった一方で、その推進には大学の自己改革を含めた事業促進の取り組みが必要との指摘もありました。

●**企業からは**、学生の新しい視点を取り入れることで、

自社研究の拡充や若手人材の指導力育成に繋がる有意義な取り組みである、との評価を頂きました。また、より一層の促進には、受入側としても変化する努力が必要であるとの指摘がありました。

●**学生からは**、インターンシップ経験をとおして、「大学の研究室では学べないことを学べた」という意見や、「従来の研究手法を問い直す好機になった」などの報告がありました。くわえて、「大学からのより組織的なサポートがほしい」

という課題も提起されました。

*
最後に、来賓の宮本室長からは、協議会のインターンシップは産学連携の裾野を広げる貴重な機会であり、インターンシップを契機とした大学と企業の交流や共同研究の可能性を持っているとのご期待の言葉をいただきました。パネリスト一同、今後も産学官で連携して研究型インターンシップを推進していくことを確認し、100分に及ぶ討論会を終えました。

企業・学生交流会

30社を超える企業にご参加いただき、パネル形式での企業説明会を実施。企業側は自社のインターンシップテーマと併せて、事業の強みや将来の展望、求める人材像などを説明。学生たちは、関心のある企業の担当者積極的に話しかけることで、情報収集に励みました。



交流会



参加企業によるポスター展示